

弥勒請問章和訳

袴谷 憲昭

ここに和訳して紹介する「弥勒請問章(*Byams ṣus kyi leḥu*)」とは、『一万八千頌般若 (*Aṣṭādaśasāhasrikā-Prajñāpāramitā*)』(略号 *ADS*) チベット訳第83章¹⁾、『二万五千頌般若 (*Pañcaviṃśatisāhasrikā-prajñāpāramitā*)』(略号 *PVS*) チベット訳第72章²⁾に相当する箇所を指す。この章を「弥勒請問章」と呼ぶのは、おそらくチベットにおける伝統であって、インドに端を発するものではなからう³⁾。

この章に始めて注目したのは、筆者の知るかぎり E. Obermiller が最初である⁴⁾。わが国では山口益博士が『仏教における有と無との対論』において、清弁 (*Bhāvaviveka* or *Bhavya*) の『中観心論註思摂炎 (*Madhyamakahṛdayavṛtti-Tarkajvālā*)』(略号 *TJ*) 所引の『般若経』の文との関連から、かの Obermiller の説を紹介して、「二万五千頌般若の弥勒の請問なる一章は、般若経が解深密経と同じき意趣の上に置かれんとした般若経の歴史的進展による加上」であると述べ、さらに「学派的色彩の漸く加はるに至らんとする時代の瑜伽唯識派として、中観派に対してかかる弥勒の請問なる一章の文を提出し、以て瑜伽唯識が大乗の標識たる般若の本意を満足するものであると示すに至ったことは、あり得らるることと思はれる」と言明されたが、残念ながらこの章の所在は不明とされたのであった⁵⁾。

1) P. 版, No. 732, Phi, 168b¹-180a⁴.

2) P. 版, No. 731, Di, 243a³-254b²: No. 5188, Ca, 369a³-380a².

3) 以下に示すように、清弁の引用では『般若経 (*Śes rab kyi pha rol tu phyin pa = Prajñāpāramitā*)』、無性の引用では『大般若波羅蜜多経 (= *Mahā-Prajñāpāramitā*)』として引かれ単に『般若経』の一節であることしか示さない。もしこの章が独立の一本として流行していたものとするれば、**Maitreyapariṣcchā-parivarta* などに相応する名称で引用されたはずである。しかし、その痕跡は現時点ではインドに述べない。チベット訳 *ADS* 第83章, *PVS* 第72章の章名は *Byaṅ chub sems dpahi slab pa rab tu dbye (phye) ba* である。チベットにおける問題の呼称は例えば, *Tsoṅ kha pa, Legs bśad sñiṅ po*, P. 版, No. 6142, Na, 120b⁸-121a⁵ など参照。

4) E. Obermiller, "The Doctrine of Prajñāpāramitā", *AO*, XI (1932), pp. 97-98.

5) 山口益『仏教における有と無との対論』(1941年), pp. 150-153. なお同書。pp. 392-393 において *TJ* 所引の『般若経』の文を和訳にて紹介。

また、É. Lamotte は『解深密経』チベット訳の校訂ならびに仏訳に対する序文中で、玄奘訳『撰大乘論釈』のみにおいて無性 (Asvabhāva) が『大般若波羅蜜多経』として引用する文に注目し、そこに『般若経』から『解深密経』へと展開する思想史的意義を認めたのである⁶⁾。しかし、彼もやはり、その典拠を『般若経』中に明示することができず、単に玄奘訳『大般若波羅蜜多経』600巻を指示するに止まった⁷⁾。

その思想史的 중요さにもかかわらず、従来指摘困難だった上述の清弁と無性の引用典拠を、PVS サンスクリット写本中に始めてトレースして紹介したのが、わが国の飯田昭太郎氏である⁸⁾。同時に氏は、同写本のこの箇所を E. Conze と共同で校訂し公表した⁹⁾。この箇所がチベットにおいて「弥勒請問章」と呼称さ

6) É. Lamotte, *Samdhinirmocana Sūtra: L'explication des mystères* (Louvain, Paris, 1935), Préface にて無性所引の文を仏訳で紹介 (p. 15) した直後 “Cet extrait de la *Mahāprajñāpāramitā* est important. Avec ses théories des trois caractères et du (Rien-qu'idée) (*viññaptimātra*), il indique le thème général sur lequel sont venus se greffer les développements du *Samdhinirmocana*, du *Laṅkāvatāra* et du *Ghanavyūha* (*sic.*) que l'école Yogācāra systématisera dans ses traités.” (p. 16) という。

7) Lamotte 前掲書中ではその典拠に触れていないが、同教授 *La somme du grand véhicule d'Asaṅga* (Louvain, 1938), Tome II, p. 91 では、大正大藏経, No. 220 = Śatasāhasrikā と示す。しかし、この漠然とした指示は現段階ではなんの根拠もないことが判明した。この無性所引の文を含む「弥勒請問章」は現存漢訳諸本にその対応箇所を見出しえないことがすでに報告されているからである (本稿註10参照)。

なお本稿の目的とは直接関係のないことではあるが、かつて筆者は玄奘訳無性釈論の特質を論じ、玄奘訳のみにおいてチベット訳にはない箇所の多くを玄奘加筆と断じたのであるが、この引用箇所については同じ条件下にあるにもかかわらず、内容的観点より玄奘加筆の可否を問うことは保留にしておいた (拙稿「MS. に対する Asvabhāva 註釈の特徴—チベット訳を資料として—」、『印仏研』19-1, p. 439 参照)。しかるに問題の引用文が玄奘訳『大般若波羅蜜多経』中に認められないことが判明した現時点では、玄奘加筆の可能性が薄まり、玄奘が用いたサンスクリット原本にはかかる経文があったとする方向に向わねばならない。

8) Shōtarō Iida, “Āgama (Scripture) and Yukti (Reason) in Bhāvaviveka”, 『金倉博士古稀記念・印度学仏教学論集』(京都, 平楽寺書店, 1966), pp. 85-91, Point II. The Maitreya Chapter and Bhāvaviveka. この論文を知ったのは服部正明教授の御教示による (1975年5月24日, 大谷大学における印仏研・学術大会にて)。記して感謝申上たい。

9) E. Conze and Iida Shotaro, “Maitreya's Questions in the *Prajñāpāramitā*”, *Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou*, (Paris, 1968). 東大写本, 松濤目録 (*A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*), No. 234 を底本とし Cambridge Add. 1628, 1629 を比較対照した校訂本。

れ、チベット訳 *PVS* 第72章、*ADS* 第83章に対応することは劈頭に示したとおりである。なお、サンスクリット写本のこの箇所が、漢訳諸本には対応箇所を欠くも、上記のチベット訳に対応することは、すでに干瀉竜祥博士によって指摘されていた¹⁰⁾。

本稿は、E. Conze・飯田昭太郎氏校訂のサンスクリットを底本とし和訳によってこの章を紹介せんとするものである。この章の成立年代¹¹⁾およびその唯識思想史上における意義については稿を改めて論じたいと考える。和訳にあたっては Conze の英訳を参照した¹²⁾。また和訳によって専門家にはかえって意味が曖昧になるような *technical term* の場合には、漢訳慣用語およびサンスクリットを補っておいた。なお和訳中に示したアラビア数字は校訂本において飯田氏が付した分節番号である。必ずしも妥当とは思わない箇所も存するが、対応の便宜のため今はこれに従う。ローマ数字は英訳中に Conze が示した章節番号であり、そこに並記した表題は英訳を参考に筆者が与えたものである。作業の性質上チベット訳3本もいちいち厳密に対照すべきであったが、筆者個人の時間的制約のため、意を尽すことができなかつたのを遺憾とする。

和 訳

I 菩薩の学ぶべき諸問題

(1)そのとき、マイトレーヤ (Maitreya) 菩薩大士は世尊 (Bhagavat) にこう申しあげた。(2)「世尊よ、もしもすべての存在 (*sarva-dharma*) が無存在の性質 (*abhāva-svabhāva*) のものであるなら、世尊よ、智慧の完成 (*prajñāpāramitā*) について実践

10) R. Hikata, *Suwikrāntavikrāmi-Paripṛcchā Prajñāpāramitā-sūtra* (Fukuoka, 1958), Table III (3), note 1, "This SK. portion (= Ms. 462a-467a) is missing in each of Ch. MPPSs, but it corresponds to the Tib. Chap. 83 of kri-brgyad-stoṅ-pa, and also to the Chap. 72 of stoṅ-phrag-ñi-śu-lña-pa."

11) Obermiller が Bu ston の仏教史に基づいて "evidently a later production" (*History of Buddhism by Bu-ston*, II, p. 50, n. 335) といったように後世の産物であることは間違いないとしても下限が問題である。漢訳諸本中には存在しないがその一部が玄奘訳無性積論にあることより、それ以前であるという見当はつく。しかし、この章が『般若経』から『解深密経』へ展開する過程の産物であるとみて『解深密経』以前の成立であるというには論証が必要であろう。

12) Conze, *The Large Sutra on Perfect Wisdom with the divisions of the Abhisamayālaṅkāra*, (University of California Press, Berkeley, Los Angeles, London, 1975), pp. 644-652.

し、菩薩の学道 (bodhisattva-sīkṣā) について学ぼうと欲する菩薩大士は、物体 (色, rūpa)¹³⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか、感覚 (受, vedanā)・表象 (想, saṃjñā)・意欲 (行, saṃskāra)・認識 (識, vijñāna)¹⁴⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。視覚の領域 (眼処, cakṣur-āyatana)・聴覚の領域 (耳処, śrotra°)・嗅覚の領域 (鼻処, ghrāṇa°)・味覚の領域 (舌処, jihvā°)・体覚の領域 (身処, kāya°)・意覚の領域 (意処, mana°) についてどのように学ぶべきでしょうか、物体の領域 (色処, rūpa°)・音声の領域 (声処, śabda°)・香臭の領域 (香処, gandha°)・風味の領域 (味処, rasa°)・感触の領域 (触処, spraṣṭavya°)・存在の領域 (法処, dharma°)¹⁵⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。視覚の要素 (眼界, cakṣur-dhātu)・物体の要素 (色界, rūpa°)・視覚の認識要素 (眼識界, cakṣur-vijñāna°)……意覚の要素 (意界, mana°)・存在の要素 (法界, dharma°)・意覚の認識要素 (意識界, mana-vijñāna°)¹⁶⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。視覚の接触領域 (眼触処, cakṣuḥ-saṃsprāyatana), 聴覚・嗅覚・味覚・体覚・意覚の接触領域¹⁷⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。無明 (avidyā)・形成力 (行, saṃskāra)……生 (jāti)・老死 (jarā-maraṇa)¹⁸⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。苦の真理 (苦諦, duḥkha-satya)・集の真理 (集諦, samudaya°)・滅の真理 (滅諦, nirodha°)・道の真理 (道諦, mārga°)¹⁹⁾ についてどのように学ぶべきでしょうか。(3) 物的な (有色, rūpin) もの (dharma)²⁰⁾。

13) 物体 (rūpa) 以下ないし本節末尾の仏法 (buddha-dharma) にいたるまでのものは、いわば Abhidharma 的法の分類を列挙したもの。『三十頌』第20偈に対する安慧釈に “yena yena vikalpenēti / yad yad vastu prakalpyate / ādhyātmikaṃ bāhyaṃ vāntaśo yāvad buddha-dharmā api /” (Lévi, ed., p. 39, ll. 11-12) といわれる場合には、おそらくここに列挙されたような法が意識されていたとみなしなければならない。その意味で、一見無味乾燥な列挙ながら重要なものである。

14) 以上、存在の基本的範疇たる五蘊 (pañca-skandha)。

15) 以上、十二処 (dvādaśāyatana)。

16) 以上、十八界 (aṣṭādaśa-dhātu)。Conze は以上の3範疇を “the five skandhas, the twelve sense fields, the eighteen elements” と意識す。

17) 諸感覚機能を器官と認識という三者の接触の方面より把えたもの。cf. *Abhidharma-kośabhāṣya* (Pradhan, ed., 略号 *AKBh*), “sparśāḥ ṣaṭ (v. III-30b) cakṣuḥ-saṃsparśo yāvan manaḥ-saṃsparśa iti / te punaḥ saṃnipāta-jāḥ / (v. 同上) trayāṇāṃ saṃnipātāj jātā indriyārtha-vijñānānām /” (p. 142, l. 21-p. 143, l. 2)。

18) 以上、十二支縁起 (dvādaśāṅgaḥ pratīyasamutpādaḥ)。

19) 以上、四聖諦 (catvāry ārya-satyāni)。

20) 一応「もの」と訳しておいたが、以下すべてに dharma が補われる。以下の分類はもののあり方 (dharma) を Abhidharma 的分析において考察する場合の諸概念である。

非物体的なもの（無色, arūpin)²¹⁾, 見えるもの（有見, sanidarśana）・見えないもの（無見, anidarśana)²²⁾, 抵抗のあるもの（有対, sapratigha）・抵抗のないもの（無対, apratigha)²³⁾, 有為のもの(saṃskṛta)・無為のもの(asaṃskṛta), 有漏のもの(sāsrava)・無漏のもの(anāsrava)²⁴⁾, 欠陥のあるもの(有罪, sāvadya)・欠陥のないもの(無罪, anavadya), 劣ったもの(hīna)・勝れたもの(praṇīta)²⁵⁾, 内的なもの(ādhyātmika)・外的なもの(bāhya)²⁶⁾, 見られるもの・聞かれるもの・感覚されるもの・認識されるもの(見聞覚知, dr̥ṣṭa-śruta-mata-vijñāta)²⁷⁾, 過去・未来・現在のもの(atitānāgata-pratyutpanna), 善か不善か決定できるもの・できないもの(kuśalākuśala-vyākṛtā-vyākṛta)²⁸⁾, 欲望よりなる世界にかかわるもの(欲界繫, kāma-pratisaṃyukta)・物体よりなる世界にかかわるもの(色界繫, rūpa°)・非物体よりなる世界にかかわるもの(無色界繫, arūpya°)²⁹⁾, 有学に属するもの(śaikṣa)・無学に属するもの(aśaikṣa)・非学非無学に属するもの(naivaśaikṣa-nāśaikṣa-)³⁰⁾についてどのように学ぶべきでしょうか。(4)強欲(貪, rāga)・嫌悪(瞋, pratigha)・高慢(慢, māna)・無明(avidyā)・

21) “rūpaṃ hi sapratighvāt sarvāudārikam / arūpiṇāṃ vedanā pracārāudārikatayā” (AKBh, p. 15, l. 9).

22) “ye punar ime aṣṭādaśa dhātava.uktas teṣāṃ kati sanidarśanāḥ katy anidarśanāḥ / sanidarśana eko'tra rūpaṃ (v. I-29a)” (AKBh, p. 18, l. 24-p. 19, l. 1).

23) “kati sapratighāḥ katy apratighāḥ / sapratighā daśa rūpiṇaḥ (v. I-29 bc)” (AKBh, p. 19, ll. 3-5).

24) “saṃskṛtā mārga-varjitāḥ / sāsravāḥ (v. I-4bc)” (AKBh, p. 3, ll. 8-9). “kati sāsravāḥ katy anāsravāḥ / ……” (AKBh, p. 21, l. 21-p. 22, l. 1).

25) “dharmāṇāṃ idānīṃ kecit paryāyā ucyante / sāvadyā nivṛtā hīnāḥ kliṣṭā dharmāḥ (v. IV-127ab) kliṣṭānāṃ dharmāṇāṃ sāvadyā nivṛtā hīnā itī paryāyāḥ / śubhāmalāḥ / praṇītāḥ (v. IV-127bc) kuśalānāsravāṇāṃ praṇītā itī paryāyāḥ /” (AKBh, p. 275, ll. 7-12).

26) “katy ādhyātmikā dhātavaḥ katy bāhyāḥ……” (AKBh, p.27, ll. 1-6).

27) “yac cakṣur-vijñānenānubhūtaṃ tad dr̥ṣṭam ity uktam / yac chrotra-vijñānena tac chrutam / yan mano-vijñānena tat vijñātam / yat ghrāṇa-jihvā-kāya-vijñānais tan matam /” (AKBh, p. 245, ll. 14-16).

28) “eṣāṃ aṣṭādaśa-dhātūnāṃ kati kuśalāḥ katy akuśalāḥ katy avyākṛtāḥ……” (AKBh, p. 20, ll. 4-15).

29) eṣāṃ aṣṭādaśa-dhātūnāṃ kati kāma-dhātṷ-āptāḥ katy rūpa-dhātṷ-āptāḥ [katy arūpya-dhātṷ-āptāḥ]……(AKBh, p. 20, l. 16-p. 21, l. 20). 今の場合, °pratisaṃyukta も °dhātṷ-āpta も同義。

30) “śaikṣāṇāṃ dharmāṇāṃ śaikṣāiva prāptiḥ aśaikṣāṇāṃ aśaikṣāiva naivaśaikṣā-nāśaikṣāṇāṃ tu bhedaḥ” (AKBh, p. 64, l. 24).

見解(見, *drṣṭi*)・疑惑(疑, *vicikitsā*)³¹⁾についてどのように学ぶべきでしょうか。吝嗇(慳, *mātsarya*)・施与(施, *dāna*), 悪い習慣(*dauḥśilya*)・良い習慣(戒, *śila*), 憎悪(瞋恚, *vyāpāda*)・忍耐(忍, *kṣānti*), 怠惰(懈怠, *kauśīdyā*)・勤勉(進, *vīrya*), 散乱(乱, *vikṣepa*)・瞑想(定, *dhyāna*), 悪慧(*dauṣprajñā*)・智慧(慧, *prajñā*)³²⁾についてどのように学ぶべきでしょうか。分別(*vikalpa*)・空性(*śūnyatā*), 特徴(相, *nimitta*)・無特徴(無相, *ānimitta*), 誤った願い(*mithyā-praṇihita*)・正しい願い(*samyak°*), 浄(*śubha*)・不浄(*aśubha*)³³⁾のあり方(*dharma*)についてどのように学ぶべきでしょうか。(5)煩惱(*kleśa*)と煩惱の捨断(*kleśa-prahāṇa*), 雑染(*saṃkleśa*)と清

31) 以上, いわゆる六煩惱(*kleśa*)。これはむしろ *Abhidharma* 教学よりも唯識学派で主張されたもの。遅い成立を示唆するか。列挙順はチベット訳3本ともに一致。『三十頌』第11cd-12a では *kleśā rāga-pratigha-mūḍhayaḥ māna-dṛg-vicikitsāśca* とあり安慧釈も *rāga, pratigha, moha (= avidyā), māna, dṛś (= dṛṣṭi), vicikitsā* の順であるから本章の場合と *moha, māna* の順が異なる。ちなみに *Abhidharmasamuccaya* では “*rāgaḥ pratigho māno’ vidyā vicikitsā satkāyadrṣṭiḥ*” (V. V. Gokhale, ed., p. 15, ll. 31-32) とあり, (*satkāya*)-*dṛṣṭi* が後置される点が本章と異なる。

なお本校訂本中に *drṣṭe* とあるは *drṣṭau* と正すべきであろうし, *vicikitsāyām* とあるのは *vicikitsāyām* のミスプリであろう。

32) マイナス・プラスのあり方を対にした一群。プラスの方はいわゆる六波羅蜜の徳目が並んでいる。*AKBh* (p. 267) でも六波羅蜜は説かれているが, これらがどういう系統を意識した一群か筆者には未詳。

33) 同じくマイナス・プラスのあり方を対にした一群であるが, 筆者にはどのような性格の一群か未詳。プラスの方は空性・無相・無願にも解しうるが, その場合は浄・不浄がわからない。

しかるにチベット訳3本を対照してみると問題は一応解決するようである。

No. 731, “*stoṅ pa ñid dañ rnam par stog pa dañ / mtshan ma med pa dañ / mtshan ma dañ / smon pa med pa dañ / log paḥi smon lam dañ / mi dge baḥi chos dañ / mi rtag pa dañ / sdug bsñal ba dañ bdag med pa*” (244a²⁻³).

No. 732, “*rnam par rtog pa dañ / stoṅ pa ñid dañ / mtshan ma dañ / log paḥi smon lam dañ smon pa ma mchis pa dañ / mi sdug paḥi chos rnam dañ mi rtag pa dañ / sdug bsñal ba dañ / bdag med pa rnam*” (69a⁶⁻⁷).

No. 5188, “*rnam par rtog pa dañ / stoṅ pa ñid dañ / mtshan ma dañ / mtshan ma ma mchis pa dañ / log paḥi smon lam dañ / smon pa ma mchis pa dañ / sdug pa dañ / mi sdug paḥi chos rnam*” (370a³⁻⁴).

チベット訳によれば, 最後の No. 5188 を除き, この文は二群に分けられている。すなわち, 最初の一群はいわゆる「三解脱門」とそのマイナス面, 第二群は「四顛倒」とそれに対する *aśubha* (不浄), *anitya* (無常), *duḥkha* (苦), *anātman* (無我) である。No. 731 と No. 732 とではマイナス方面, プラス方面の列挙順が異なるが, これは先の註32)の場合でも同様であり, 今は内容上問題となることではない。No. 5188 が最もよくサンスクリットに合致するが, 「三解脱門」は明確に意識して訳されている。

Conze は校訂本, 英訳中にも上述のことには一切触れない。ただ文中の *dharma* が単数か複数かを諸本校合しているにすぎない。チベット訳 No. 731, No. 732 をとるとすれば Conze の考えるように “*śubha-aśubha-dharmeṣu*” ではなく, 「四顛倒」群すべてにかかる複数の *dharma* でなければならない。従って Comp. ではない。

以上, 提示された諸群を検討したわけであるが, 各群を中心に考えれば飯田氏の示した分節番号はあまり根拠のあるものとはいえない。

浄(vyavadāna), 輪廻(saṃsāra)と涅槃界(nirvāṇa-dhātu)についてどのように学ぶべきでしょうか。仏法(buddha-dharma)³⁴⁾についてどのように学ぶべきでしょうか。」

II 名称の偶然性

(6)このようにいわれて、世尊はマイトレーヤ菩薩大士につきのように言った。「マイトレーヤよ、智慧の完成について実践し、菩薩の学道について学ぼうと欲する菩薩大士は、物体は単なる名称にすぎない³⁵⁾(nāma-mātrakaṃ rūpaṃ)と学ぶべきであり、……ないし、仏法にいたるまで〔すべては〕単なる名称にすぎないと学ぶべきである。」

(7)すると、マイトレーヤ菩薩大士は世尊につきのように申しあげた。「世尊よ、これは物体であるという命名(nāmadheya)は事物にかかわっている(savastuka)と感得され(upalabhyate), ないし、これは仏法であるという命名は事物にかかわっていると感得されます。というのも〔それらは〕形成因(saṃskāra-nimitta)³⁶⁾に基づいているからです。このような場合に、菩薩大士はどのようにして物体は単なる名称にすぎないと学ぶべきでしょうか、……ないし、仏法は単なる名称にすぎないと学ぶべきでしょうか。しかるに、このように事物にかかわっていない(avastuka)とすれば、その名称(nāman)が単なる名称にすぎないということすらも適切ではありません。すなわち、これは物体であるというのが単なる名称にすぎないというのも適切ではないし、……ないし、これは仏法であるというのが単なる名称にすぎないというのも適切ではありません。」

(8)このようにいわれて、世尊はマイトレーヤ菩薩大士につきのように言った。

34) Conze はそのまま “the Buddhadharmas” とする。『八千頌般若』に “tvam anupūrveṇa buddha-dharmāṇaṃ labhī bhaviṣyasi” (Vaidya, ed., p. 63, ll. 19-20) とあり、この仏法を梶山雄一教授は「仏陀の徳性」と和訳し(『大乘仏典2・八千頌般若経I』p. 154), その註記(註113, 同書 p. 329)で「仏陀の教え」の意味にもとれるとしている。この場合の ‘buddha-dharma’ もその意味を決定しがたいが、おそらくは「仏陀の徳性」の意に解してよいであろう、ちなみに、AKBh では buddha-dharma の用例が2箇所(p. 1, l. 11, p. 411, l. 8)みられるが、いずれも「仏陀の徳性」の意味である。後者では明らかに「不共仏法」の意味、前者も Yaśomitra の AKV (p. 4, l. 29)で “buddha-dharmeṣv āveṇik’ādiṣu” と説明されている。

35) Conze は瑜伽行派に愛用された「単なる名称にすぎない」という表現は『般若経』の古い章句に遡れると註す。

36) Conze は the sign of something conditioned と訳す。後に vastu と同格で扱われることから分るように、この場合は vastu に基づいて nāman があるとする考えを表明しているので「形成因」と訳した。

「これは物体であるというこの命名は偶然的なもの (*āgantuka*) であり, その形成因 (*saṃskāra-nimitta*) である事物 (*vastu*) に対して付加されたもの (*prakṣipta*) である³⁷⁾……ないし, これは仏法であるというこの命名も偶然的なものであり付加されたものである。(9)マイトレーヤよ, その形成因によって, 事物に対して物体であるといい, この名称に対して物体であるという³⁸⁾理解 (*saṃpratyaya*) や了解 (*pratyayāgama*) や認知 (*pratisaṃvedanā*)³⁹⁾があるのだから, それゆえ, マイトレーヤよ, この方法 (*pariyāya*) によってつぎのように知るべきである。『これは物体であるとか……ないし, これは仏法であるというこの命名は, 偶然的なものであり, その形成因である事物に対して付加されたものである』と。(10)マイトレーヤよ, おまえはこれをどう思うか。この場合に, あるものは, その形成因である事物そのものに対して, 表象 (想, *saṃjñā*), 概念 (施設, *prajñapti*), 名称 (*nāman*), 言葉 (言説, *vyavahāra*), 執著 (*abhiniveśa*) をもつのではなからうか。」

(1)彼は言った。「そのとおりです, 世尊よ。」

(2)〔世尊は言った。〕「それで, マイトレーヤよ, この方法によってもまたつぎのように知るべきである。『これは物体であるとか……ないし, これは仏法であるというこの命名は偶然的なものであり, その形成因である事物に対して付加されたものである』と。」

Ⅲ 言語表現を越えた根源的世界

(13)そのとき, マイトレーヤ菩薩大士は世尊につぎのように申しあげた。「世尊

37) “*āgantukam etan nāmadheyaṃ prakṣiptam*” という表現につき, Conze は『八千頌』“*āgantukam etan nāmadheyaṃ prakṣiptam/ avastukam etan nāmadheyaṃ prakṣiptam/ anātmīyam etan nāmadheyaṃ prakṣiptam/ anārambaṇam etan nāmadheyaṃ prakṣiptam yad-uta sattvaḥ sattva iti /*” (Vaidya, ed., p. 24. ll. 3-4) を参照す。またその Haribhadra 註で *prakṣiptam* は “*prakṣiptam adhyāropitaṃ samvṛti-mātram*” (Wogihara, ed., p. 179, l. 8) と解釈されている。

38) *nāman* と *vastu* の関係については, 唯識説では特に「四尋思」「四如実遍智」で問題にされる。例えば, 『莊嚴經論』に “*tatra nāmano vastuny āgantukatva-paryeṣanā ……*” (Lévi, ed., p. 168, l. 21 ff)。なおこの箇所訳文については補註1参照。

39) Conze は the conviction, the assignment, the recognition と訳し, さらに註を付す (校訂本, p. 235, n. d, 英訳, n. 5)。チベット訳 No. 5188 には *yan dag par rtogs pa, rab tu rtogs pa, so so yañ dag par rig pa* とある。しかるに Nos. 731, 732 はかなりの増広があり対応が明確でないが, No. 731 では *yid ches pa, khoñ du chud pa, so so rig pa*, No. 732 では *rig pa, rtogs pa, ḥtshal ba* がこれら三語に対応するかと思われる。

よ、もしもそうなら、それに基づいて、これは物体であるとか……ないし仏法であるという名称・表象・概念・言葉がおこる、その形成因である事物としての、物体の自性 (svabhāva) は感得されうるでしょうか。」

(14)このようにいわれて、世尊はマイトレーヤ菩薩大士につきのように言った。「形成因たる事物に対して、物体であるという名称・表象・概念・言葉がおこるが、マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。それは物体の自性であるのか、あるいは単なる概念にすぎない (prajñaptimātra) のか。」

(15)彼は言った。「単なる概念にすぎません、世尊よ。これは単なる概念にすぎません。」

(16)世尊は言った。「しからば、マイトレーヤよ、それに基づいて、これは物体であるとか……ないしこれは仏法であるという名称・表象・概念・言葉がおこる、その形成因である事物のもとに、物体の自性が感得されるというような考えがどうしておまえに浮ぶのか。マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。それは感覚・表象・意欲・認識、……ないし仏法の自性であるのか、あるいは単なる概念にすぎないのか。」

(17)彼は言った。「単なる概念にすぎません、世尊よ。これは単なる概念にすぎません。」

(18)世尊は言った。「しからば、マイトレーヤよ、感覚・表象・意欲・認識、……ないし仏法の自性が感得されるというような考えがどうしておまえに浮ぶのか。」

(19)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、もしも、物体……ないし仏法というものが、単なる名称・表象・符牒 (saṃketa) ・概念・言葉にすぎないとすれば、このような場合に、物体について、すなわちこれは単なる名称・表象・符牒・概念・言葉にすぎないものであるといわれ、またこのような場合に、……ないし仏法について、すなわちこれは単なる名称・表象・符牒・概念・言葉にすぎないものであるといわれる、[そのような物体ないし仏法の] 自性はまったく感得されないのではありませんか。」

(20)世尊は言った。「マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。物体というものが単なる名称・表象・符牒・概念・言葉にすぎないものであり、……ないし仏法というものが単なる名称・表象・符牒・概念・言葉にすぎないものである場合、その生起 (utpāda) や消滅 (vyaya) あるいは雑染 (saṃkleśa) や清浄 (vyavadāna) が了知される (prajñāyate) であろうか。」

(21)彼は言った。「そうではありません、世尊よ。」

(22)〔世尊は言った。〕「しからば、マイトレーヤよ、物体……ないし仏法などというものの自性が感得されるというような考えがどこでおまえに浮びえよう。」

(23)マイトレーヤが申しあげた。「それでは、世尊よ、物体……ないし仏法はいかなるありかたにおいても (sarvaśas) 個別的特質としても (svalakṣaṇena)⁴⁰⁾まったく存在しないのでしょうか。」

(24)世尊は言った。「マイトレーヤよ、わたしは、物体……ないし仏法がいかなるありかたにおいても個別的特質としても存在しないとは説かない。」

(25)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、物体……ないし仏法はどのようにして存在するのでしょうか。」

(26)世尊は言った。「マイトレーヤよ、物体……ないし仏法は世間的符牒の言葉 (loka-saṃketa-vyavahāhāra) として存在する、しかし最高の実在 (勝義, paramārtha) として〔存在するの〕ではない⁴¹⁾。」

(27)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、いまやわたしが世尊のおっしゃった意味を知ったように、根源的世界 (dhātu)⁴²⁾は最高の実在としてまったく言語表現を越えたもの (nirabhilāpya) であります。世尊よ、もしも、根源的世界が最高の実在として言語表現を越えたものであるなら、かの形成因であり、それに対して、物体であるという偶然的命名が付加され、……ないし、仏法であるという偶然的命名が付加される事物 (vastu) は、どうして最高の実在として存在しないことになるのでしょうか。もしもそれが最高の実在として〔存在し〕ないならば、どうして言語表現を越えた根源的世界は存在するのでしょうか。〔どうして〕形成因である事物が言語表現を越えた根源的世界であるというのは不適切なのでしょうか。」

(28)世尊は言った。「それゆえ、マイトレーヤよ、わたしはまさにこの点についておまえに尋ねよう。おまえは自分の最もよいと思うように答えなさい。マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。おまえが言語表現を越えた根源的世界にお

40) チベット訳 No. 5188, “rnam pa thams cad du mtshan ñid thams cad kyis いかなるありかたにおいてもいかなる特質によっても” (372 a^o)。答えを考慮すればこの理解の方がいい。

41) 拙稿「唯識説における法と法性」(『駒大仏教学部論集』第5号) p. 9, 註4参照。

42) Conze が Dezhung Rinpoche の説明として the *dharmadhātu* と註するがごとく, dhātu = dharmadhātu = dharmatā. この場合の dhātu は女性形で扱われる。なお dhātu に関しては前掲拙稿, pp. 7-8, 註29, 32, 33参照。

いて智慧を行使 (pracāra) している、そのような時に、おまえは、形成因であり、それに対して、これは物体であるとか、……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される、〔その〕事物を感得するであろうか。」

(29) 〔彼は言った。〕「そうではありません、世尊よ。」

(30) 〔世尊は言った。〕「それで、マイトレーヤよ、この方法によってもまたおまえはつぎのように知るべきである。『かの形成因である事物は、言語表現を越えた根源的世界と異なるものでもなく、また異ならないものでもない』と。どうして⁴³⁾、言語表現を越えた根源的世界が、それに対してこれは物体であるとか……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される、この形成因である事物と異なるものでもなく、異ならないものでもないのかといえ、マイトレーヤよ、もしも言語表現を越えた根源的世界が、形成因たる事物と異ならないとすれば、今しもあらゆる愚かな凡夫 (bāla-pṛthagjana) たちが完全に涅槃するであろうし (parinirvāyus), このうえなく正しい覚り (無上正等菩提, anuttara-samyak-saṃbodhi) を直観するであろう (abhisambudheran)⁴⁴⁾。(31) マイトレーヤよ、もしも言語表現を越えた根源的世界が、形成因たる事物と異なっているとすれば、もはや、それによって言語表現を越えた根源的世界の体得 (prativeda) がありうるようなその因 (nimitta) も感得されないであろう。それで、マイトレーヤよ、この方法によってもまた、おまえはつぎのように知るべきである。『言語表現を越えた根源的世界は、それに対してこれは物体であるとか……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される、その形成因たる事物と異なるものでもなく、またそれと異ならないものでもない』と。」

(32) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、もしも、言語表現を越えた根源的世界にかかわって智慧を行使しつつある菩薩大士が、それに対してこれは物体であるとか……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される、その形成因たる事物を感得しないとすれば、世尊よ、それは、存在しているもの (vidyamāna) が感得されないのでしょうか、あるいはまた存在していないもの (avidyamāna) が感得されないのでしょうか。」

(33) このようにいわれて、世尊はマイトレーヤ菩薩大士につぎのように言った。

43) sacet とあるを Conze の指示により katham と読む (校訂本, n. n)。

44) 分節(30)に対応するチベット文には異同あり。No. 5188, 373a²⁻⁶, No. 731, 247b^{8-248a³}, No. 732, 173a⁴⁻⁸ 参照。

「実に、マイトレーヤよ、その形成因たる事物はいかなる存在性 (vidyamānatā) でもなく、また非存在性 (avidyamānatā) でもない。どうしてかといえは、マイトレーヤよ、おまえが形成因たる事物を分別している場合には、その形成因たる事物は、分別による (vikalpatas) 把握 (grahaṇa) になるし、あるいはまた、言語表現を超えた根源的世界にかかわって智慧を行使しつつあるおまえが、〔それを〕分別しない場合には、〔それは〕無分別による (nirvikalpatas) 把握になるからである。」

(34) マイトレーヤが申しあげた。「そのとおりです、世尊よ。」

(35) 世尊は言った。「しかし、マイトレーヤよ、そうであるならば、これ、すなわち、それに対してこれは物体であるとか……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される形成因としての事物は単なる分別にすぎないではないか。それが単なる分別にすぎず、あるいはまた無分別の根源的世界にあるものが分別を離れているとき、それに対してこれは物体であるとか……ないし仏法であるというこの偶然的命名が付加される、そのものについて、いかなる存在性 (vidyamānatā) あるいは非存在性 (avidyamānatā) が感得されようか。」

IV もののあり方に関する三種の様相⁴⁵⁾

(36) マイトレーヤが申しあげた、「世尊よ、智慧の完成について実践し、ものあり方の区分⁴⁶⁾に関する熟練 (法差別善巧, dharma-prabheda-kauśalya) を行っている菩薩大士は、いくつの様相 (ākāra) によって、物体の区分設定 (差別施設, prabheda-prajñapti) ……ないし仏法の区分設定を理解すべき (anugantavya) でしょうか。」

(37) 世尊は言った⁴⁷⁾。「マイトレーヤよ、智慧の完成について実践し、ものあり

45) この章節が特に唯識の三性説と関連して重要である。

46) dharma-prabheda とは本章の劈頭に列挙されたような、あらゆるものあり方に関する区分である。以下に示されるのと類似の dharma の取り扱い方が Asaṅga の *Ahbidharmasamuccaya* に認められる。すなわち蘊・界・処に関する三種の区分であって、その文はすでに指摘しておいた。前掲拙稿, p. 3, 註9 参照。

47) この分節(37)以下の文が清弁の *TJ* に引かれる。対応する箇所それぞれに分節番号を挿入して示すと次のとおりである。

“ḥdir smrad pa / de ni śes rab kyi pha rol tu phyin pa las kyaṅ gsuṅs te / (37) byams pa byaṅ chub sems dpaḥ gzugs kyi bye brag gdags pa ni rnam pa gsum gyi[s] khoṅ du chud par bya ste / ḥdi lta ste / ḥdi ni kun btags paḥi gzugs so // ḥdi ni rnam par brtags paḥi gzugs so // ḥdi ni chos ṅid kyi gzugs so śes bya bas

方の区分に関する熟練を行っている菩薩大士は、三種の様相によって、物体の区分設定 (rūpa-prabheda-prajñapti) ……ないし仏法の区分設定 (buddha-dharma-prabheda-prajñapti) を理解すべきである。すなわち、これは仮構された物体 (parikalpitaṃ rūpam) であり、これは分別された物体 (vikalpitaṃ rūpam) であり、これはものの本性 (法性) としての物体 (dharmatā-rūpa) である、……ないし、これは仮構された仏法であり、これは分別された仏法であり、これはものの本性としての仏法である、と⁴⁸⁾。」

38) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、仮構された物体とはなんでしょうか、分別された物体とはなんでしょうか、ものの本性としての物体とはなんでしょうか、……ないし、仮構された仏法とはなんでしょうか、分別された仏法とはなんでしょうか、ものの本性としての仏法とはなんでしょうか。」

39) 世尊は言った⁴⁹⁾。「マイトレーヤよ、その形成因たる事物に対して、物体であ

so // (38) de la kun btags paḥi gzugs gañ še na / (39) gzugs šes bya ba ni miñ dañ ḥdu šes dañ / gdags pa dañ / tha sñad la brten nas gzugs kyi ṅo bo ñid du rtog pa gañ yin pa de / (43) de ni rdsas su med do [//] (38) de la rnam par btags paḥi gzugs gañ še na / (40) rnam par rtog pa la brten nas gañ la miñ dañ / ḥdu šes dañ / gdags pa dañ / tha sñad kyi gzugs šes bya ba la sogs par mñon par brjod pa ñid de / (44) ḥdi ni rnam par rtog pa rdsas su yod pa ñid la brten nas rdsas su yod pa yin gyi / rañ dbañ du ḥjug pa las ni ma yin no // (38) de la chos ñid kyi gzugs gañ še na / (41) kun btags paḥi gzugs des rnam par btags paḥi gzugs de la rtog tu ṅo bo ñid med pa dañ / chos bdag med pa ñid dañ / yañ dag paḥi mthaḥ la sogs pa gañ yin pa ste / (45) de la rdsas su yod pa yañ ma yin la / rdsas su med pa yañ ma yin te / rnam par btags paḥi don gyis stoñ pa ñid dañ / rnam par šes pa yod paḥi phyir ro // šes gsuñs so” (TJ. P. 版, No. 5256, Dsa, 229b³-230a¹)
下線の表現は本章中にはみあたらない。

48) 以上に列挙された parikalpita, vikalpita, dharmatā が順次に三性説の parikalpita, paratantra, pariniṣpanna に相当するものである。なお buddha-dharma の場合は複数で示されるが、ここではあえて訳出しない。以下にても同様。

49) この分節(39)以下の文が無性釈に引かれる。清弁の場合と同様に対応する分節番号を挿入して示すと次のとおり。

「如大般若波羅蜜多經中亦説，(39) 若於彼彼行相事中，遍計為色為受為想為行為識乃至為一切仏法，依止名想施設言説，遍計以為色自性乃至一切仏法自性，是名遍計所執色乃至遍計所執一切仏法，(40) 若復於彼行相事中，唯有分別法性安立，分別為縁，起諸戲論，仮立名想施設言説，謂之為色乃至謂為一切仏法，是名分別色乃至分別一切仏法，(41) 若諸如来出現於世若不出世，法性安立法界安立，由彼遍計所執色故，此分別色，於常常時，於恒恒時，是真如性，無自性性，法無我性，實際之性，是名法性色，乃至，由彼遍計所執一切仏法故，此分別一切仏法，於常常時，於恒恒時，乃至是名法性一切仏法」(大正31, p. 399b-c)。

るといって、名称・表象・符牒・概念・言葉に依って、物体の自性としての仮構 (parikalpanā) がある、これが仮構された物体 (parikalpitaṃ rūpam) である、……ないし、これが仮構された仏法 (parikalpitā buddha-dharmāḥ) である。(40) また、その形成因たる事物にとって、単なる分別にすぎないものの本性 (vikalpa-mātra-dharmatā) に対する限定性 (avasthānatā) があり、分別を条件とする言語表現性 (vikalpa-pratītyābhilapanatā) があれば、それに対して物体であるとか……ないし仏法であるというこの名称・表象・符牒・概念・言葉があるわけで、これが分別された物体 (vikalpitaṃ rūpam)……ないし分別された仏法 (vikalpitā buddha-dharmāḥ) である。(41) 如来 (tathāgata) たちが現われても現われなくとも、この様々なもののあり方の本性 (諸法実相, dharmāṇāṃ dharmatā) ・ものの確定性 (法住性, dharma-sthititā) ・ものの根源的世界 (法界, dharma-dhātu) は確定したものであり⁵⁰⁾、かの妄想された物体のゆえに、分別された物体が永久に (nityaṃ nitya-kālam) ・永遠に (dhruvaṃ dhruva-kālam)⁵¹⁾ 無自性 (niḥsvabhāvatā) であり⁵²⁾、固定的実体のないもの (法無我, dharma-nairātmya) であり、あるがまま (真如, tathatā) であり、究極の真実 (実際, bhūta-koṭi) であること、これがものの本性としての物体 (dharma-rūpa) であり、ないし [ものの本性としての] 仏法である。」

(42) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、これら三種の物体のうち、どの物体が無実体なもの (adravya) と考察されるべきでしょうか、どれが有実体なもの (sadravya) と考察されるべきでしょうか、どれが無実体なものでもなく有実体なものでもなく、最高の実在によって特徴づけられたもの (paramārtha-prabhāvita) と考察されるべきでしょうか、……ないし、三種の仏法のうち、どれが無実体なもの

50) “yā utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sthitāivēyaṃ dharmāṇāṃ dharmatā dharmasthititā dharmadhātuḥ”. 類似の表現については、本註記42に掲げた拙稿の同簡書参照。

51) dharmāṇāṃ dharmatā に関する類似の表現中、この「永久に・永遠に (nityaṃ nitya-kālam dhruvaṃ dhruva-kālam)」は『解深密経』中に特徴的にあらわれるものである。『解深密経』チベット訳は “rtag pa rtag paḥi dus dañ ther zug ther zug gi dus su” (Lamotte, ed., p. 52, ll. 12-13 or p. 70, ll. 13-14). 本章のチベット訳3本中、No. 5188, 375a⁷, No. 732, 175a⁸ はこれと同じ訳語であるが、No. 731, 250a² は “(b)rtag ciñ rtag paḥi dus brtan šiñ brtan paḥi dus su” とある。しかし原語が同じであったことは容易に想像がつく。Lamotte の還元 “nityakālam śāsvatakālam” は訂正されるべし。

52) “tena parikalpita-rūpeṇa tasya vikalpita-rūpasya…… niḥsvabhāvatā……” の文は唯識文献でよく認められる表現、例えば『三十頌』第21偈, “tasya (= paratantrasya) pūrveṇa (= parikalpitena) rahitatā” などを思わせる。補註2参照。

のと考察されるべきでしょうか、どれが有実体なものと考察されるべきでしょうか、どれが無実体なものでもなく有実体なものでもなく、最高の実在によって特徴づけられたものと考察されるべきでしょうか。」

(43)世尊は言った。「マイトレーヤよ、仮構された物体なるもの、これが無実体なものと考察されるべきである。(44)この分別された物体なるものは分別(vikalpa)なる有実体性(sadravyatā)に基づいたものであるから⁵³⁾有実体なものと考察されるべきであるが、しかしそれ自体で起るものとして(svatantra-vṛttitah)〔考察されるべきではない〕、(45)ものの本性としての物体なるもの、それが無実体なものでもなく有実体なものでもなく、最高の実在によって特徴づけられたものと考察されるべきである。……ないし、マイトレーヤよ、ものの本性としての仏法なるもの、それが無実体なものでもなく有実体なものでもなく、最高の実在によって特徴づけられたものと考察されるべきである。」

(46)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、物体であるとか……ないし仏法であるというのは無二のもの(advaya)を数えたのであると世尊は説かれたが、それで、このように物体の区分設定……ないし仏法の区分設定がある場合には、なにを意図して(saṃdhāya)、世尊は、物体であるというのは無二のものを数えたのであり、……ないし仏法であるというのは無二のものを数えたのであると説明した(nirdiṣṭa)のでしょうか。」

(47)世尊は言った。⁵⁴⁾「マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。仮構された物体における無実体性(adravyatā)が物体(rūpa)なのかあるいはそうではないのか。」

(48)〔彼は言った。〕「そうではありません、世尊よ。」

(49)〔世尊は言った。〕「では、また、それに対してなされる物体であるという単なる名称・表象・概念・言葉にすぎないものが物体であるのかどうか。」

53) Conze が示すチベット訳 rnam par rtog pa rdsas su yod paḥi phyir” を参考にして訳した。

54) これ以下の引用をなす無性積の文を分節番号を挿入して示すと次のとおり。

「如大般若波羅蜜多經中説，(47) 慈氏，於汝意云何，諸遍計所執中，非実有性為色非色，(48) 不也，世尊，(49) 諸依他起中，唯有名想施設言説性為色非色，(50) 不也，世尊，(56) 諸円成実中，彼空無我性為色非色，(57) 不也，世尊，(51)(56)(60) 慈氏，由此門故，応如是知，諸遍計所執性決定非有，諸依他起性唯有名想施設言説，諸円成実空無我性是真实有，我依此故密意説言，彼無二数謂是色等」(大正31, p. 382c)。この玄奘訳では唯識説における三性の用語がはっきりと使用されている。

50)彼は言った、「そうではありません、世尊よ。」

51)〔世尊は言った。〕「それで、マイトレーヤよ、この方法によってもまたつぎのように知るべきである。『仮構された物体は物体(rūpa)でもなく非物体(arūpa)でもない。また物体でも非物体でもないものは無二のもの(advaya)である。これを意図して、わたしは、これは物体であるというのは無二のものを数えたのであると説いたのである』と。

52)マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。分別された物体の有実体性(sadravyatā)であって、それに基づいて物体であるという名称・表象・概念・言葉がおこるものがその物体であるのかどうか。」

53)彼は言った。「そうではありません、世尊よ。」

54)〔世尊は言った。〕「マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。妄想された物体である因によって、分別された⁵⁵⁾物体が、その自性をもっており、その特質をもっていることが、物体であるのかどうか⁵⁶⁾。」

55)彼は言った。「そうではありません、世尊よ。」

56)〔世尊は言った。〕「それで、マイトレーヤよ、この方法によってもまたおまえはつぎのように知るべきである。『分別された物体は物体でもなく非物体でもない。また物体でも非物体でもないものは無二のものである。これを意図して、わたしは、これは物体であるというのは無二のものを数えたのであると説いたのである』と。

55) 下の註に示すようにサンスクリット校訂本では parikalpita とあるも vikalpita として読む。

56) この一節サンスクリットとチベット訳3本とでは理解が異なる。

Skt. “yā nimittena (sic. tena?) parikalpitena rūpena parikalpitasya (sic. vikalpitasya?) rūpasya tat-svabhāvatā sal-lakṣanatāpi (sic. tal-lakṣanatāpi?) nu tad rūpam.”

No. 5188, “rnam par brtags paḥi gzugs de ñid la kun tu brtags paḥi gzugs des deḥi ño bo ñid ma yin ṣiñ deḥi mtshan ñid ma yin pa gañ yin pa de gzugs yin nam /” (376b³⁻⁴).

No. 731, “rnam par brtags paḥi gzugs de ñid la yoñs su brtags paḥi gzugs kyi ño bo ñid med pa dañ deḥi mtshan ñid ma yin pa gañ yin pa de gzugs yin nam /” (251a⁷).

No. 732, “rnam par rtags paḥi gzugs de ñid la kun rtags paḥi gzugs des / deḥi ño bo ñid ma yin ṣiñ / deḥi mtshan ñid ma yin pa gañ yin pa de gzugs yin nam /” (176b⁵⁻⁶).

これは本稿註52で示した表現と類似する点より dharmatā にかかわるものとすれば、Tib. のように「その無自性、無特質」という理解がよい。しかるに、本稿註57で示す対応関係より vikalpita を主題とすると解せば Skt. も可。補註2参照。

である』と。

56'57) マイトレーヤよ、おまえはこれをどう思うか。ものの本性としての物体が、固定的実体のないこと（無我，*nairātmya*）によって特徴づけられていることが物体であるのかどうか。」

57) 彼は言った。「そうではありません、世尊よ。」

58) [世尊は言った。]「また、このように、ものの本性としての物体（*dharmatā-rūpa*）が、物体というものの本性であること（*rūpa-dharmatā*）が物体であるのかどうか。」

59) 彼は言った。「そうではありません、世尊よ。」

60) [世尊は言った。]「それで、マイトレーヤよ、この方法によってもまたつぎのように知るべきである。『ものの本性としての物体は物体でもなく非物体でもない。また物体でも非物体でもないものは無二のものである。これを意図して、わたしは、これは物体である、……ないし仏法であるなどといわれることについてなざるべきこと[すべては]無二のものを数えたのであると説いたのである』と。」

V 遍知・捨断・現証・修習の特質

61) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、智慧の完成について実践し、物体についてこのように無二の特質（*advaya-lakṣaṇa*）に熟練（善巧，*kuśala*）し、……ないし、仏法についてこのように無二の特質に熟練し、両極端（*anta-dvaya*）を離れて中道（*madhyamāṃ pratipadam*）を完遂した（*pratipanna*）菩薩大士にとって、遍知の特質（*lakṣaṇa-parijñā*）とはいかなるもの、捨断の特質（*lakṣaṇa-prahāṇa*）とはいかなるもの、現証の特質（*lakṣaṇa-sākṣātkriyā*）とはいかなるもの、修習の特質（*lakṣaṇa-bhāvanā*）⁵⁷⁾とはいかなるものであると考察されるべきでしょうか。」

62) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、智慧の完成について実践し、両極端を離れて中道を完遂した菩薩大士にとって、物体は遍知でもなく遍知でないものでもないが、これこそまさに彼の遍知である、……ないし、仏法は遍知でもなく遍知でないものでもないが、これこそまさに彼の遍知である。63) 物体は捨断でもなく捨断

57) 飯田氏はこの箇所を分節しないが、不当。この前後は次のような対応関係にある。
 (47) : (48) : (49) : (50) : (51) = (52) : (53) : (54) : (55) : (56) = (56)' : (57) :
 (58) : (59) : (60) という関係であり、それぞれ *parikalpita*, *vikalpita*, *dharmatā* に関することをテーマとしている。

58) これら四語については前掲拙稿，p. 4，註18参照。

でないものでもないが、これこそまさに彼の捨断である、……ないし仏法は捨断でもなく捨断でないものでもないが、これこそまさに彼の捨断である。64物体は現証でもなく現証でないものでもないが、これこそまさに彼の現証である、……ないし、仏法は現証でもなく現証でないものでもないが、これこそまさに彼の現証である。65物体は捨断する〔実践〕道の修習でもなく修習でないものでもないが、これこそまさに彼の修習である、……ないし、仏法は捨断する〔実践〕道の修習でもなく修習でないものでもないが、これこそ彼の修習である。」

VI 菩薩の涅槃

66) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、智慧の完成について実践し、このように遍知と捨断と現証と修習とを具備した菩薩大士の涅槃とはどのようなものでしょうか。」

67) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、菩薩大士たちの涅槃は深奥であり (甚深, *gambhira*)、最高に深奥である (*parama-gambhira*)。』

68) マイトレーヤが申しあげた。「どんな理由によって、菩薩大士たちの涅槃はこのように深奥であり、最高に深奥なのでしょう。」

69) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、菩薩たちの涅槃は涅槃 (*nirvāṇa*) でもなく涅槃でないもの (*anirvāṇa*) でもないが、それゆえ、深奥で最高に深奥なものといわれるのである。」

70) マイトレーヤは申しあげた。「世尊よ、どうして菩薩たちの〔涅槃は〕涅槃でもなく涅槃でないものでもないのでしょうか。」

71) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、他人の利益 (*parārtha*) に依拠して (*ārabhya*) 輪廻 (*saṃsāra*) を捨てないことは涅槃ではなく、自分の利益 (*ātmārtha*) に依拠して涅槃を捨てないことは涅槃でないものではない〔からである〕。』

72) マイトレーヤは申しあげた。「世尊よ、もしも菩薩大士が他人の利益に依拠して輪廻を捨てないならば、輪廻を捨てないのですから、どうして彼は〔逆に〕涅槃を捨ててしまわないのでしょうか。73) 世尊よ、もしも菩薩大士が自分の利益に依拠して涅槃を捨てないならば、涅槃を捨てないのですから、どうして彼は〔逆に〕輪廻を捨ててしまわないのでしょうか。」

74) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、この場合、智慧の完成について実践する菩薩大士は、輪廻であっても輪廻として分別することなく、涅槃であっても涅槃と

して分別することがないが、(75)このように彼が分別しない場合には、これ、すなわち輪廻と涅槃とは平等なのである。それはどうしてか。彼が輪廻を輪廻として分別しないときには輪廻を厭わず (nôdvijati)、同様に涅槃を涅槃として分別しないときには涅槃を厭わない。このように無分別の根源的世界 (avikalpa-dhātu) に定住した (pratiṣṭhita) ものは、この道理のゆえに、輪廻を捨てることもなく、涅槃を捨てることもないと知られるべきである。」

(76)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、智慧の完成について実践し、無分別の根源的世界に定住した菩薩大士にとって、輪廻が、捨てられない (na tyaktaḥ) と同様に、取られない (nādatta) ものであるなら、どうして捨てられないもの (atyakta) なのでしょう。涅槃が、捨てられないと同様に、取られないものであるなら、どうして捨てられないものなのでしょう。」

(77)世尊は言った。「マイトレーヤよ、わたしは、このように輪廻の取得 (ādāna)⁵⁹ も不取得 (anādāna) も説かないし、このように涅槃の取得も不取得も説かない。(78)しかしながら、マイトレーヤよ、智慧の完成について実践する菩薩大士が、無分別の根源的世界を境界とする (ālambana) 智 (jñāna) によって心の自在 (citta-vaśita) を獲得して、十方世界 (daśadiśi loke) のガンジス河の砂ほどの世界において、方便の熟練 (upāya-kauśalya) によって輪廻のうちに示現すること (saṃdarśana) に基づいて、わたしは、完全に涅槃した菩薩大士たちは輪廻を捨てないと説いたのであり、(79)空性にして不可得な根源的世界 (śūnyatānupalambha-dhātu) に定住していることに基づいて、わたしは「彼らが」涅槃を捨てないと説いたのである。」

(80)マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、無分別 (avikalpanā) の要約された特質 (samasta-lakṣaṇa) はどのように考察されるべきでしょうか。」

(81)世尊は言った。「マイトレーヤよ、物体 (rūpa)……ないし仏法 (buddha-dharma) および物体の空性 (rūpasya śūnyatā) ……ないし仏法の空性 (buddha-dharmāṇām śūnyatā)、それら様々なもののあり方およびその空性は存在と非存在の無二性 (bhāvābhāvādvayatā) であり、あるいは無戲論 (aprapañcanā) であるが、このことが、マイトレーヤよ、無分別の要約された特質であると考察されるべきである。」

Ⅶ 種姓の問題

(82)マイトレーヤは申しあげた。「世尊よ、すべての声聞 (śrāvaka) たちが涅槃に

59) テキストには saṃsārasya…… mokṣaṇam とある。Conze の註するチベット訳 len to、および下の類似の表現により、saṃsārasya…… ādānam と読む。

定住すること (nirvāṇa-pratisthā) は絶対的に決ったもの (ekāṃśenaikāṃśiki) なのかどうでしょうか。」

83) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、そうではない。それはなぜか。なぜなら、マイトレーヤよ、この世界は様々な素質の根源をもち (nānā-dhātuka), 種々の素質の根源をもつもの (aneka-dhātuka)⁶⁰⁾であって、その様々な素質の根源において、生存する (bhūta) 生あるものの家系 (有情種姓, sattva-gotra) など⁶¹⁾が感得される。84) マイトレーヤよ、生あるものたちのなかには、最初から勝れた殊別 (praṇītaṃ viśeṣam) を追求し勝れた殊別だけを理解する (adhigacchati) 家系の生まれつきのも (gotra-jāti) もいる。85) また、最初から劣った殊別 (hīnaṃ viśeṣam) だけを追求し劣った殊別を理解し、そのみで満足する家系の生まれつきのももいる。86) また、最初から劣った殊別を追求し劣った殊別だけを理解するが、そのみで満足せず、そのためにさらに勝れた殊別を追求し勝れた殊別を理解する家系の生まれつきのももいる。」

87) マイトレーヤが申しあげた。「世尊よ、第三の家系の段階(種姓地, gotra-bhūmi) にある生あるもの (sattva) であって、阿羅漢の状態 (arhatva) を得て、このうえもない正しい覚りをさらに追求しつつあるが、再び生まれかわっていないもの (anupapadyamāna)⁶²⁾は、どのようにして〔それを〕獲得するのでしょうか。世尊は彼の生 (upapatti) をさらに前進するものとしては (pratipattiyā)⁶³⁾ 明示され (vyākṛta) なかったのです。」

88) 世尊は言った。「マイトレーヤよ、わたしは、彼のために業 (karman) と煩惱 (kleśa) の力による生を教示しない (na prajñapayāmi) が、しかし、阿羅漢 (arhat) のためには不可思議な (acintya) 涅槃の岸に達する (nirvāṇa-para-gāmini) 生 (upapatti) を教示したのである。」

89) マイトレーヤは申しあげた。「稀有なこと (āścarya) です、世尊よ。ないし菩薩大士たちは崇高な志向 (udārāśaya) をもち、高潔な覚悟 (māhātmyādhyaśaya) を

60) この箇所につき、Conze は dhātu = kula = gotra とし、“this world has beings of various dispositions, of manifold dispositions” と英訳する。これを参考に訳した。

61) テキストには prabhṛtayaḥ とあり、今はこれに従ったが、Conze の註するところによればチベット訳は rañ bṣin mañ du = bahu-prakṛtayaḥ である。

62) 筆者に未詳。Conze が “without ever being reborn again” と英訳するのを参考に訳す。

63) 同じく筆者未詳。Conze の “(be necessary to) enable him to make further progress” を参考に訳す。なお最後の章節の主題である gotra については補註3参照。

もっております。そこで「彼らは」今や最初から勝れた殊別を追求し勝れた殊別を理解するのです。世尊よ、菩薩大士たちの崇高な志向はどのようなものであり、高潔な覚悟はどのようなものでしょうか。」

90)世尊は言った。「マイトレーヤよ、菩薩大士は、シャクラ・世界の守護者・転輪王の状態、およびあらゆる種類の世間的栄達を求めず、このうえもない正しい覚りにおける善根 (kuśala-mūla) を廻向する (pariṇāmayati) が、それらの状態における無執着なこと (niḥsaṃgatā) および無渴望なこと (niravagrahātā), これが菩薩大士の崇高な志向である。さらにまた、菩薩大士たちは、その無執着の安楽 (asakti-sukha)・無渴望の安楽 (anavagraha°)・止息の安楽 (nirvṛtti°) をすべての生あるものに共有のものとしようと欲して、すなわち輪廻を捨てないがゆえに、このうえもなく正しい覚りにおける善根を廻向するが、これが彼らの高潔な覚悟であると考察されるべきである。」

91)そのとき、マイトレーヤ菩薩大士は世尊につきのように申しあげた。「世尊よ、菩薩の徳性 (bodhisattva-dharma) は稀有にして驚くべきもの (āścaryādbhuta) です。世尊よ、菩薩の学道 (bodhisattvaśikṣā) は稀有にして驚くべきものです。稀有にして驚くべきものであるがゆえに、世尊よ、菩薩の徳性を獲得しようとする善男 (kula-putra)・善女 (kula-duhitṛ) はこのうえもない正しい覚りにたいして心をおこすべきであります。」 (1975, 7, 17)

補注1) Skt. は “tena saṃskāra-nimittena vastuni rūpam ity etasmin nāmni rūpam iti” とあるが、Tib. 訳, No. 5188 には “ḥdu byed kyi mtshan maḥi dños po des gzugs ṣes bya baḥi miñ der gzugs ṣes bya bar.....”(370b⁷⁻⁸) とあることより、vastuni を vastunā とし「その形成因である事物によって、物体であるというこの名称に対して、物体であるという.....」と訳す方が可か。

補注2) 勝呂信静教授は「唯識と法性」(『平川博士還暦記念・仏教における法の研究』, 1975), p. 258にて、この paratantra と parikalpita の関係について数例を挙げて検討。なお唯識説におけるこの関係の解釈については上田義文博士『仏教思想史研究』第1章第2節真如の項(特にpp. 38-51)参照。唯識説においては、paratantra (gen.) が parikalpita (instr.) を離れており、それが pariniṣpanna であるという理解になる。本稿註52の場合も vikalpita (gen.) が parikalpita (instr.) を離れている=無自性であると読みうる。しかるに、本稿註56に示した tena とされる箇所に nimittena ともあるので、一応理由の意味にとって訳した。なお本稿註56の場合の理解の相違については上田博士前掲書御指摘のような背影があったかもしれない。

補注3) 高崎直道博士の関連論文「GOTRABŪ と GOTRABŪMI」(『金倉博士古稀記念・印度学仏教学論集』) pp. 313-336 ; 「GOTRABŪMI 覚え書」(『駒大仏紀要』25) pp. 1-27 ; 「種姓に安住する菩薩」(『中村博士還暦記念・インド思想と仏教』) pp. 207-222 参照。